

基督教学研究

第 20 号

論文

トレルチとカルヴィニズムの社会哲学

——デモクラシーとの関連に注目して——……………高野晃兆：一

トレルチとセバステイアン・フランク……………安酸敏眞：二

テイリッヒの生の次元論における一問題——統一概念の周辺——今井尚生：三

シュライエルマツハーの『信仰論』における罪理解……………帆 莉 猛：四

ひとり立つ人格と真の交わり……………原田博充：五

——キルケゴールの「単独者」の思想を媒介として——……………六

講演

真理の多形性——ドイツ文化プロテスタンティズムの今日的意義について——

……フリードリヒ・ヴィルヘルム・グラーフ……………二三

研究ノート

表現主義とテイリッヒの視覚芸術論……………川 桐 信 彦……………三三

伝記的記述の客観性について

——E・ブッシュ『K・バルトの生涯』をめぐって——……………小川圭治……………四〇

森田雄三郎氏の逝去を悼む……………高野晃兆……………五七

彙報

彙報

二〇〇〇年度基督敎学専修講義題目

片柳栄一 教授 講義 「キリスト敎学概論」

特殊講義 「隠れたる神への思想について」

演習 「Augustinus: De trinitate」

芦名定道 助教授 特殊講義 「キリスト敎思想における「自己」の問題」

演習 「F. Schleiermacher, Der christliche Glaube, 1830/31」

片柳栄一教授・芦名定道助教授

演習 「キリスト敎学の諸問題」

林 忠良 講師 特殊講義 「キルケゴールの「自己」の概

念」

宮庄哲夫 講師 演習 「ルターの社会思想」

竹田文彦 講師 講義 「Evangelium secundum Marcum」

勝村弘也 講師 語学 「ヘブライ語文法と創世記講

読」

一九九九年論文題目

修士論文

川桐信彦 「表現主義とティリツヒの視覚芸術論」

二〇〇〇年度公開講演会

F・W・グラフ教授（ミュンヘン大学、五月一八日）

「真理の多形性―ドイツ文化プロテスタントイズムのアクチュアルな意義について―」

第一号目次

終末論の二類型

武藤一雄

キリスト論の視点

森田雄三郎

初期アウグスティヌスの人間学

金子晴勇

Lumen Christi

佐藤吉昭

ルターの„Ordnung“に関する一考察

早乙女禮子

ルターにおける信仰と礼典

竹原創一

バルト『ローマ人への手紙』における神認識

村山周治

第二号目次

オリゲネスの「キリスト教理解」

水垣 渉

ゲッセマネ

大島征二

神学における言葉の問題

竹原創一

アウグスティヌスにおける

小池三郎

ギリシャ語旧約聖書における

伊藤利行

razlozba について

エルンスト・トレルチにおける

安酸敏眞

„Komprimis“の概念

シェリングに於ける

「世界経験」について

森 哲郎

ルターにおける「外」と

「内」についての一考察

片柳俊子

第三号目次

キルクゴール研究の方法について

エイレナイオスと聖書

テイリツヒの芸術神学について

絶対の相の下に

ルターの律法理解

聖書へブル語統辞論の

テキスト言語学的考察

小川圭治

菊地栄三

田辺明子

片柳栄一

宮庄哲夫

勝村弘也

第四号目次

ルターの解釈学は

「実存論的解釈」といえるか

キプリアヌスの教会理解

ノビリの印度伝道

テンブルックのヴェーバー解釈を

めぐる論争

今井 晋

佐藤吉昭

塩谷 悟

高野晃兆

フィロンとキリスト教

ルターの抵抗権思想における服従の問題

創世記テキストにおける語りの技法

シェリングに於ける神話と世界

ヘクサプラ断片の残存率について

解釈学的教義学の構成について

内村鑑三と「身体の救い」

言語芸術作品としての旧約聖書物語テキスト

エルンスト・トレルチにおける

「歴史の神学」の構想

教義学的思考における解釈学的循環の問題

特別号 目次

第六号(武藤一雄名誉教授古希記念)

神学的宗教哲学について

平石善司

早乙女禮子

勝村弘也

森 哲郎

伊藤利行

森田雄三郎

原島 正

勝村弘也

安酸敏眞

掛川富康

武藤一雄

アレクサンドリアのフィロンにおける

能動と受動の問題

水垣 涉

奇跡物語へのマージナリア

大島征二

アルバート・シュヴァイツァーの聖餐論へ

の新約聖書学的批判

田辺明子

ヨセフスのモーセ物語について

秦 剛平

エイレナイオスの人間理解

菊地栄三

キプリアヌスの『棄教者論』考察

佐藤吉昭

アウグスティヌスの時間論

片柳栄一

ルターにおける「アフエクトゥス」の問題

今井 晋

ルターとアウグスティヌス

金子晴勇

神学的構造主義の問題

森田雄三郎

M・ヴェーバー「古代ユダヤ教」と

パリアア民族の概念

高野晃兆

浄土系仏教とキリスト教の救済論の

一異に関する考察

原田博充

日本の伝統的宗教的心情とキリスト教

との関連について

名木田薫

ウィリアム・ケアリの伝道に対する貢献

塩谷 悟

神概念の転換

小川圭治

第七号目次

ルターと神学的決定論

金子晴勇

Imago Deiとしての精神の自覚の

三一的構造

片柳栄一

脚下照願

武藤一雄

M・ヴェーバー「古代ユダヤ教」と

カスパリの批判(一九二二)

高野晃兆

パウル・テイリツヒと象徴の問題

芦名定道

第八号目次

キリスト教概念の成立(その二)

水垣 涉

アルベルト・シュヴァイツァーの

「イエス神秘主義」

笠井恵二

シュリング「自由論」再考(二)

森 哲郎

ルターにおける職業観の問題

早乙女禮子

第九号目次

西田幾多郎とキリスト教

小川圭治

R・ブルトマンにとつての

イエスの意義に関して

名木田薫

旧約物語テキストにおける

ヒンネー(見よ)の機能

勝村弘也

シュリング「自由論」再考(二)

森 哲郎

P・テイリツヒの時間論

芦名定道

キェルケゴールにおける

山本忠義

「自己」の定義」について

第十号目次

ルターにおける「体験」の問題

——一つの覚書——

今井 晋

シュタウピッツとルターの神秘思想

ルターとカールシュタット(二)

金子晴勇

ルターにおける試練について

宮庄哲夫

神学主義と宗教主義

竹原創一

オリゲネス「原理論」に於ける

武藤一雄

悪の問題序論

久山道彦

キェルケゴール「死に至る病」の

「キリスト教的理解」

信岡茂浩

第十一号目次

創造と進化——創造における無——

森田雄三郎

ルターとカールシュタット(二)

神言表の可能性とその(言述的)

「合理化」の問題

ヘブライズムとギリシャ語聖書

エラスムスの「敬虔」概念の倫理的基礎

内村鑑三における「内と外」の論理

原島 正

キリスト教倫理の源泉

七十人訳翻訳史序説(二)

隠喩と神学的実在論

ニュッサのグレゴリオスの

「鏡における神認識」の存否

オリゲネスにおける神のエネルギー

の概念について

クリュソストモスの解釈学——神理解の

可能性と不可能性の問題を巡って

伊藤邦幸氏の逝去を悼む

第十五号目次

罪をおかすことよって罪から救贖できる？

——ユダヤ教神秘主義の失敗からの

警告——

ブルトマンと聖書

アウグスティヌスの恩寵論

ニシビスのエフライムの解釈学

P・ティリツヒにおける「カイロス」と

認識の形而上学——歴史の相対主義

の克服を巡って——

「コヘレトの言葉」の構造と思想

——一人称表現の用法をめぐって——

第十三号目次

内村鑑三における「内と外」の論理

原島 正

キリスト教倫理の源泉

七十人訳翻訳史序説(二)

隠喩と神学的実在論

ニュッサのグレゴリオスの

「鏡における神認識」の存否

オリゲネスにおける神のエネルギー

第十四号目次

キルクゴールにおける(論理的問題)

罪の自覚——その人間学的考察(二)

モルトマンの歴史理解——希望の神学と

現代世界の問題

探求する聖霊——初期オリゲネスにおける

解釈的原理

ニュッサのグレゴリオスにおける「鏡」

土井健司

武藤慎一

高野晃兆

森田雄三郎

笠井恵二

伊藤邦幸

武藤慎一

今井尚生

金井由嗣

第十二号目次

神探求の場の開示

二つの歴史的社会的イエス研究について

「思い煩う」(ルカ二・二二~三三)

について

レッシングの神学思想——序説——

自由意志論争におけるエラスムスとルター

アントニオスの修道

片柳栄一

大島征二

田辺明子

安酸敏真

畑 宏枝

竹田文彦

松丸 太

林 忠良

内村公義

笠井恵二

久山道彦

土井健司

名木田薫

伊藤利行

芦名定道

第十六号(故武藤一雄名誉教授追悼号)

目次

- 神・愛・場所——ブーバーから武藤への
接近の二つの試み—— 水垣 渉
- アルバート・シュヴァイツァーの聖餐論に
おける問題設定 田辺明子
- 殉教者カルタゴ司教キプリアヌスの
古代殉教観の軌跡 佐藤吉昭
- 古代教会におけるキリスト教経済思想の形成
——トレルチ「社会学説」研究ノート——
高野晃兆
- 二つの恩恵——アウグスティヌス「贖責と
恩恵」十一—十二章 片柳栄一
- ルターのキリスト神秘主義 金子晴勇
- 言葉と経験——ルターとディオニシウスの
かわり—— 竹原創一
- 若きレッシングの宗教思想 安酸敏眞
- キリスト教の自然理解について——序章——
今井 晋
- 神の思かさと人間の賢さ 森田雄三郎
- キリスト教の終末論における将来的な
ものと現在のなもの 原田博充

「キリスト教と仏教」に関する若干の考察

名木田燕

モルトマンの聖書理解 笠井恵二

M・ブーバーとハシディズム 早乙女禮子

Wie wird man seiner Hingeburt gewiß?
——Eine Untersuchung zum Reinen

Land Buddhismus der Heian und

Kanakura Zeit マルティン・レップ

第十七号目次

ルターの神観における神秘的なるもの

ルターの詩篇解釈における語り手の問題

金子晴勇

エラスムスにおける「反野蛮人論」と
ヒューマニズム 竹原創一

畑 宏枝

「ベルシヤの賢者」アフラハトの解釈学
ティリッヒ「教義学」における歴史の問題

武藤慎一

今井尚生

この世界への、この世界からの脱出

——ハンナ・アーレントのアウグス
ティヌス解釈 片柳栄一

エラスムス「現世の軽蔑」に関する一考察
——その執筆動機と思想—— 畑 宏枝

ルターの詩篇解釈における悔い改めと沈黙
——第四編五節の「悔い改めなき」
(PsG)と「沈黙しなき」(PsH)の
解釈をめぐって—— 竹原創一

レッシングにおける真理探求の問題
安酸敏眞

第十八号(水垣渉名誉教授追悼号)

目次

- 応報か、行為・帰趨運関か？ 勝村弘也
- 聖書における沈黙について 伊藤利行
- 生成の論理と存在の論理
- 古代キリスト教思想の解釈への
一試論—— 土井健司
- クリュストモスにおける神の下降と
人間の上昇——解釈学的観点から——
武藤慎一

キェルケゴールの「罪」理解——「死に至る病」
を手掛かりに 山本忠義

価値および意味と宗教の問題——トルヘルチ

およびティリッヒの思想を手掛かりと
して—— 今井尚生

現代キリスト教思想における

終末論の可能性

芦名定道

明治キリスト教と朝鮮人李樹廷

金 文吉

“Hajithologia” als die wissenschaftliche

Konzeption Tešutaro Arigas・Zum

Problem der Interpretation von Ex. 3,

14ff. als theologisch-hermeneutischer

Methode für die Theologiegeschichte

掛川富康

オリゲネス「原理論」における本性と被造性

久山道彦

第十九号目次

キリスト教古代の女性殉教者再考(一)

佐藤吉昭

第一次ユダヤ戦争に見るフィロカイサル

秦 剛平

たちとその系譜

アフラハトにおける神の下降と人間の上昇

—— 解釈学的観点から—— 武藤慎一

ササン朝ペルシアにおけるキリスト教徒

迫害と「エデッサ殉教者伝集」 竹田文彦

「エレンミヤの告白」における

呪いの言葉をめぐる 大石祐一

知恵の人格性と一人称表現——箴言八章

一二節「私は知恵」の理解——

金井由嗣

ヒンソ宗教的多元論の科学的構造

小倉和一

京都大学基督教学会規約

- 一、本会は京都大学基督教学会と称し、事務局を京都市左京区吉田本町 京都大学大学院文学研究科キリスト教学研究室に置く。
- 二、本会は基督教学研究の進展を目的とする。
- 三、本会は前条の目的を達成するために以下の事業を行う。
 - (一) 研究発表会、講演会などの開催
 - (二) 学会誌「基督教学研究」の発行
 - (三) 内外の研究機関及び研究者との相互交流
 - (四) その他の必要な事業
- 四、本会は基督教学の研究に従事する者、もしくは本会の趣旨に賛同する者をもつて会員とする。入会は委員会の承認による。
- 五、本会の経費は、会費、寄付金、その他の収入をもつてこれに充てる。

会員は年会費五千円を納めるものとする。会員のうち年額一口五千円を二口以上納めるものを維持会員とする。
- 六、本会の運営のために次の委員を置く。
 - (一) 代表者 (一名)
 - (二) 委員 (若干名)
 - (三) 監事 (一名)

代表者、委員、監事は会員の間から選出し、任期を二年とし、再選を妨げない。

七、本会は毎年総会を開き、会計及び一般報告を行い、必要事項を協議する。

八、本規約は委員会の発議に基づき、総会において変更することができ。

(本規約は一九九八年二月から施行する。)

代表者：小池三郎

委員：高野晃兆、林 忠良、片柳栄一、宮庄哲夫、

勝村弘也、芦名定道、武藤慎一

監事：水垣 渉

執筆 者

高野 晃 兆 大阪府立工業高等専門学校名誉教授

安 酸 敏 眞 聖学院大学教授

今 井 尚 生 西南学院大学文学部助教

帆 莉 猛 関東学院女子短期大学助教

原 田 博 充 京都市キリスト教会牧師

フリードリヒ・ヴィルヘルム・グラフ

ミュンヘン大学神学部教授

川 桐 信 彦 京都大学大学院文学研究科後期課程在学中

小 川 圭 治 筑波大学名誉教授

関東学院学院長

『基督教学研究』投稿規定

- 一、寄稿者は本学会員にかぎる。
- 二、内容は未発表の学術論文であること。採否ならびに掲載の時期は、査読委員による査読の報告に基づき、編集委員会が決定する。
- 三、寄稿原稿は、論文については四〇〇字詰原稿用紙四〇（五〇枚（注・図表などを含む）相当、研究ノートについては三〇枚相当とする。
- 四、寄稿原稿の執筆細目および査読審査規定については、別途、原稿執筆要綱等の内規にて定めることとする。
- 五、寄稿原稿には、欧文タイトル、執筆者欧文氏名を付記すること。
- 六、原稿が採用された場合、執筆者には抜刷三〇部を贈呈する。（本規定は二〇〇〇年二月一六日から施行する）

第二十号編集実務委員会

小池三郎
高野晃兆
林忠良
片柳栄一
宮庄哲夫
勝村弘也
芦名定道
武藤慎一

二〇〇〇年十二月二十日印刷
二〇〇〇年十一月三十日発行

定価一五〇〇円(十税)

発行者

京都大学基督教学会
京都市左京区吉田本町
京都大学大学院文学研究科
キリスト教学研究室内

発行人

小池三郎

発売元

(株)一麦出版社

印刷所

(株)アイワード

札幌市中央区南8条西25丁目2-12

本誌の御註文は、最寄のキリスト教書店、もしくは、右記、京都大学基督教学会(振替〇一〇三〇一五七七二〇七)へ、送料とも一七一〇円(本体価格一五〇〇円、送料二二〇円)を添えてお申込み下さい。

JOURNAL
OF
CHRISTIAN STUDIES
KIRISUTOKYOGAKU KENKYU

Vol.20

December, 2000

Contents

- Troeltsch und die Sozialphilosophie des Calvinismus*
—eine Betrachtung über ihren Zusammenhang mit der Demokratie—
.....Teruyoshi Takano
- Ernst Troeltsch und Sebastian Franck*Toshimasa Yasukata
- A Problem in Tillich's Dimension —Theory of Life* ...Naoki Imai
- Schleiermachers Sündenlehre in der »Glaubenslehre«*
.....Takeshi Hokari
- A Personality living alone and the genuine Communion through
the Medium of the Thought of "that single Individual" in S.
Kierkegaard*Hiromitsu Harada
- Die Polymorphie der Wahrheit: Über die aktuelle Bedeutung
des deutschen Kulturprotestantismus*
.....Friedrich Wilhelm Graf
- Expressionism and Paul Tillich's Philosophy of Visual Art*
.....Nobuhiko Kawagiri
- Über die Objektivität in der biographischen Darstellung*
—von E. Busch: K. Barths Lebenslauf—Keiji Ogawa
- A Eulogy on the late Mr. Yuzaburo Morita* ...Teruyoshi Takano

THE SOCIETY OF CHRISTIAN STUDIES
KYOTO UNIVERSITY

Kyoto Japan